天使爛漫

八乙女モンキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使爛漫

【Ｎコード】
Ｎ３１８０Ｕ

【作者名】
八乙女モンキー

【あらすじ】
性格が幼い妹と面倒見の良い兄が織り成す小さな小さな物語。他にも登場しますが、基本二人のやりとり。少しでも和んで頂けたらうれしいです。

?初めての合体

『きもちいい～！』

僕は贅沢にも遅く起きた朝に、こうしてゆっくりと飲むコーヒーが好きだ。予定のない日曜日の寝起きはこれに限る。尤も、僕が好きなのはモーニングコーヒー限定ではなく、コーヒーその物が好きだ。

どれくらい好きかを表すとしたら、密かな夢だけど世界中に存在するコーヒーを全て飲んでみたいと思うくらいだ。勿論叶う訳のない夢なので密かな夢だ。誰かに語ることは絶対にない。という解説をする前に、二階から変な叫び声が聞こえてきた。取り敢えず僕のコーヒータイムは終了ということだろう。

『にぃ～さまぁ～！』

声と共にトタトタと階段を下りてくる音が聞こえた。間違えなく先ほどの奇声の正体は僕の妹だ。もし違っていたら、妹しかいない筈の二階から謎の奇声がしたという恐怖だった訳で、安堵半分残念半分といった心境。残念なのは妹の本日の産声があの奇声だったことだ。

バタッ！　と音を立ててリビングのドアを開いてやってきたのは、フード付きのウサギパジャマ。勿論フードにはウサギの耳と赤い目が二つくっついている。怖い表現をすれば、フードを被るとウサギ

の口の中に妹の顔があるってことだ。つまり、食われてる……！？

「兄様！　熱心渇望です！」

そんな馬鹿なこと考えは端に捨ておいて、妹は大きく口を開いて僕に詰め寄るようにやってきた。妹の髪は色素が薄く、白に近い色をしている。実際には白ではなくて、少しだけ青が混じっている。綺麗な髪の色だが、普通の人と違うという点では異色の目で見られてしまうのが僕としては問題だ。

ま、幸いにも友人達がいるクラスになったお陰で学校での心配は半分くらいに抑えられている。あっ、妹は中学二年生。残念なことに、色々と足りていないために小学生と思われて当然なんだけど、一応覚えておいて欲しい。それで、小柄な体系で１５０ｃｍに今年の春の身体検査で漸く届いたと大はしゃぎしていた。体系以上に小さな顔。目も鼻も口も小さいが、そんな小さな口を精一杯開きながらこうして言葉を紡ぐ姿は愛らしさを誘う。

髪は前髪はパッツン。後ろも短くショートに整えてある。長い方が似合いそうなのだけど、絶対に痛めたり、引っ掛けたりしそうなのでずっとこの短さを維持している。落ち着いているのが苦手なので、美容院ではなく母さんが切っている。母さんと話している間は足をバタバタさせてもきちんと身体を揺らしたりはしないから。

「熱心に渇望？」

妹の言葉は辞書を引いても困難なので、兄として培ってきた経験から意味を引用しなければならない。この妹はちょっとお馬鹿なのだ。それを差し引いて余る程の無邪気さと純真さがある。

「流石に今回は意味が分からないよ」
「間違えた。兄様と念心して合体したの！」
「ああ、なんだ夢の話か」

念心合体ときたからにはどんな夢を見たのか分かった。合体ロボット物のアニメだ。宇宙を舞台にした、前世の絆を再び確かな物にしながら堕天使と呼ばれる敵を倒すお話。以前友達に借りたからと一緒に見たのをうっすらと覚えている。うっすらなのは内容がつまらなかったから、という訳じゃない。妹はアニメが好きなので色んなアニメを僕と一緒に見る。一人で見るのはイヤなんだとか。

「そうなの！　兄様と一緒に合体してすごかったの！！」

目を輝かせる妹はヒートアップ。僕の前で両手を大きく円を描いたりしている。合体でうっすらとした記憶の中からハッキリと思い出した物があった。あのアニメは少々教育に悪い！　そうだ、何故かロボット形態になって合体する時にエクスタシーを感じるんだ。その台詞が本日の妹の第一声だった筈。他にも違う感じ声があったけど。

「分かったよ。堕天使は無事倒せたのかな？」
「うんっ、無限拳で倒したの！」
「そうか。でも、寝起きにあの言葉はどうかと思うな」
「んぅ？」

どうやら寝ぼけていて覚えていないようだ。学校がある日だったら、迎えに来ていた妹の友達に聞かれていたかもしれない。危ない危ない。あの子達はからかうのが大好きな種族だから。でも、面倒見がよく、面倒を掛けまくっているにも関わらず、この妹を対等の友達として扱ってくれる。

「ともかくね、すごかったんだよ！」

聞いて聞いてと大はしゃぎ。その興奮は最高潮に達したらしく、ついにはウサギフードを被った。これはパジャマ状態の妹のトランス形態といえる。

「青いのと緑のが負けてから兄様とわたしが出たの。それで、一度は負けそうになったんだけどね、キュインキュインって熱くなってもう一度立ち上がってアタタタタタってパンチ一杯の無限拳で倒したの！」

「そっかそっか。頑張ったな」

頭というかウサギ耳付きフードを撫でる。ちょっと生地が厚いので強めに撫でないといけないので、長い時間撫でると疲れるので注意。妹は「うな～っ」と謎の声を上げている。本人曰くウサギの鳴き声らしい。実際は違うけど。ちなみに、あの掛け声は一子相伝の人だった筈。あの作品は有名なので流石に知っている。

「でもね、でもね？　にぃさまぁ……わたし、おねしょしちゃった」

「はい？」

「だからね、おねしょ……しちゃったの」

思わず撫でる手が止まる僕に、妹はもう一度答えてくれた。これはあれだろうか、興奮し過ぎて思わずお漏らししてしまったと。こんな事は今までなかったのでどう反応すべきか困ってしまった。妹のおねしょ暦は短くして終わったらしく、僕とは違って手が掛からなくて済んだと何度ネタにされているか……。この話は忘れて欲しい。

「取り敢えず布団を干さないといけないな」
「ぅん」
「ほら、元気出せ。別に今回だけなんだからそう落ち込まない」
「でも、恥ずかしいです。中学生はもう大人なのに」

ウサギフードを外すと頬朱に染めながらポツポツと呟いた。ちなみになんで妹がウサギが好きなのかは、自分の髪の色に近い存在だったからだと思う。勿論、黒や茶もいるけど、ウサギの一般的イメージは白だから。あと、なんで敬語が時々混じるのかは不明。多分、背伸びして大人っぽくなろうとしてるのかもしれない。ちょっと可愛いのでその変はツッコミを入れていない。

「母さんには怖い映画を観た後に寝たからってことにでもしておこう」
「は、はい。兄様」

コクコクと何度も頷くと僕の手を握った。その手を握り返しながら椅子から立ち上がると妹の部屋へ向かう。やはり恥ずかしいのか、階段を上がる間も無言のままだった。妹の部屋は二階に上がって直ぐにある右手の部屋。ドアは開けっ放しだったので、そのまま中に入った。

白とピンクの色合いが強い部屋。何体かのぬいぐるみがベッドや机の上に存在をアピールしている。ベッドから跳ね起きたからか、一番お気に入りのみぃーたんが床に落ちていた。それに気付いた妹が僕の手を離して、素早く拾って謝った。

「みぃーたんごめんね。わたし、すっごく慌ててて」

妹の手が離れたこともあり、僕は白いシーツに手を掛けた。

「あれ？　別に濡れてなんかないよ。確かにちょっとだけ湿ってるような箇所もあるにはあるけど。お漏らしって訳じゃないと思う」
「えぇっ？」

僕の発言に、みぃーたんを手の中でギュッと抱きしめながら目をまん丸にした。こういう仕草は小学生を超えて幼稚園生にすら見えたりする。

「でも兄様……わたしのぱんつ濡れてます」
「え？」
「ぐちゅってして気持ち悪いです」
「ん、ん？」

何か妹の話と現状がマッチしていなかった。さて、始まりを思い出そう。妹は今日どんな夢を見たと言っていたか。合体してロボットで出撃して僕と敵を倒した……と。寝起きにお漏らししたと勘違いしたとはいえ、それだけであのテンションだったとは思えない。ということは……。

「今回ばかりは僕の解決範疇にないよ！」

母さん、事件です！！　今日ばかりは仕事より何よりも優先して一刻も早く帰って来て欲しい。出来ることなら今すぐ早く。

「にぃさまぁ？」
「あー……取り敢えず、一応シーツだけは洗おう。で、その間にお風呂に入ってこようね」
「兄様も一緒？」
「一人で入れるだろう？　僕は夜に一人で入るから」

「はぁい」

素直に頷くと妹はみぃーたんをクッションの上に座らせると、収納ＢＯＸから着替えを自分で探し始める。そんな後ろ姿を見ながら僕は思う。今後はうちの妹にとってまだまだ早いようなアニメはＮＧ指定しよう。

「にーさまぁ！　これはどうかな？」

キャラ物のパンツで、口が特徴的で超人気のウサギキャラクターだ。例に漏れず妹も大好きだ。

「うん、いいと思うよ」

「やった！」

にっこりと天真爛漫な笑顔で喜ぶ妹。でも、もう少ししたらキャラ物は卒業しようね。とは思っていても、この笑顔を前にそんな無粋なことは言えないな。もう少し大人になってから、かな。

「大人……か」

今回のことは大人の母さんに任せよう。餅は餅屋であって、責任丸投げではないよ。でも、妹も少しずつは女の子から女性への階段を上っている……のかな。

?.奇跡の価値は?

朝のモーニングコーヒーは格別の美味しさを感じる。浜辺で食べるラーメンや祭りで食べる焼きそばみたいな不思議仕様になっている。コーヒーを飲みながら、色々とまったりと考えるのが好きだ。

そういえば妹が僕を兄様と呼ぶ理由を説明していなかった。何かの漫画かアニメの影響で、尊敬する人には様を付けるのが慣わしであると学んだらしい。いや、正確には学んだというよりなんとなくって感じだけど。その始まりは家族四人が揃っての夕食の時だった……。

「お兄ちゃんは今日から兄様です」

唐突になんだろうと首を傾げた僕。そんな僕ににぱにぱ笑いながら妹は続ける。

「そんけーしてる人には様が付くって言ってたの。だから、兄様なの!」

えっへんと箸を手に胸を張った妹。可愛いんだけど、兄様っていうのはちょっとくすぐったいから遠慮したい。訂正の手を入れるより先に子煩悩な母さんが口を挟んだ。

「あらあらあら。兄様、素敵な呼び方ね。ね、ね。じゃあママは？」
「ママは今日からお母様！」
「きゃぁ♪　お母様だなんて、明日は何かお土産を買ってこないといけないわね」
「やった！」

お土産の言葉に目をキラキラさせて微笑む妹。そんな妹を見て、相好を崩す母さん。そんな二人の中に入りたそうにしているけど、きっかけを掴めない父さん。自分もお父様と呼ばれたいらしい。気持ちは分からないでもないけど、声ぐらい出してアピールしようよ。わざとらしくチラチラ見ても気付かないと思うよ。

「明日の朝食は特別にホットケーキにしましょうねー」
「ホント？　わたし、お母様大好き！」
「うふふふ」

蕩けている母さんの隣で、父さんは落ち込んでいた。この状態を見れば分かるように、我が家では母の方が父よりも立場が上なんだ。たまに可哀想にもなるが、仕方ないことってあると思う。子煩悩の母さんとしては専業主婦でいたかったが、父の稼ぎが悪く、仕事を余儀なくされている。

まぁ、それだけならまだしも。残念なことに、稼ぎも母さんの方が上ときたら……仕方ないとしか言えない。結果として、我が家の主導権は母さんが握っている。

それは今現在も変わっていない。

「……ふぅ」

コーヒーを飲みながらの回想も終え、現段階での目標を掲げる。

『奇跡を起こしてアルバイトを始めること！』

僕には門限らしい門限は存在しないが、アルバイト禁止が定められている。高校二年になった今もそう。理由は母さんも仕事の都合で帰りが遅くなるので、夕ご飯を作る人間が僕しかいないのだ。妹は料理は一切出来ない。でも、家事が出来ないという訳じゃない。掃除は上手だし、洗濯機も使える。ただ、干すのが下手なのでそこは任せられない。

そんな妹だけど、もう中学二年生だ。そろそろ料理を覚えてもいい頃合だ。いや、覚えないといけない！　僕がアルバイトを始める条件がつまり、妹が料理をできるようになることだから。

あー、忘れてた。さっきの回想のことで追記しておくことが一つだけ。父さんのことは「パパは今日からお父さん」という妹の発言に背中を向けた。我が家の男は顔で笑って背中で泣けというものがある。それを実行してのことだ。……ちょっと違う気もしたけどね。

「これは奇跡に頼るしかないな」

「んぅ？　兄様、奇跡はダメ」

隣で一生懸命になってホットケーキを食べていた妹が、何故か僕の独り言にNGを出されてしまった。まずはホットケーキの作り方から教えようかと考えていたら、作ってしまったので今朝の妹の朝食はホットケーキとあいなった。

「どうして奇跡はダメなんだい？」
「奇跡は絶望の中でみぃー出す日常の光。だから、絶望しないと起きないのが奇跡」
「……ふむ」

出典元が何か気になるけど、面白いことを言われた。言っている妹自身は理解してない可能性が高いし、口の周りはシロップでベタベタなのでちょっとギャップが愛らしさを強調していた。

「でも、それだけではないと思うよ。宝くじで一等が当たったら三億だ。幸せな奇跡だよ」

僕の返答に妹は天真爛漫な微笑みと一緒に、目をキラキラと輝かせた。多分これは妹の出典物通りの返答を僕がした、ということだと思う。

「その数年後にはお金もなくなり、元の生活に戻るの。でもね、昔みたいな生活には満足できなくて、日々不満が積もる。それは本当に幸せなの？」

これが妹が考えての答えだったら、妙に悟った性格ということで今より可愛いと思えなかっただろうなぁ。早く成長して欲しいとか思いながらも、どこかこのまんまの妹でいて欲しいと思ってしまう。

「そうだね。奇跡っていうのは意外と絶望が付き物なのかもしれないね」
「でもね、兄様！　本当の奇跡って、こうした日常の中にあるものなんだよ」
「本当の奇跡？」

「うん！　こうして、わたしの直ぐ傍に兄様が居てくれる。それこそが奇跡なの。兄様が居てくれるから、わたしは幸せ。これって奇跡だよね」

目の前がぼんやりと潤む。その中に天使が一人居た。僕は慌てて妹に背を向ける。それが何故なのか……その理由は語らないでおこう。

?敬いの言葉

学校から帰ってきた後に飲むコーヒーもまた、格別な味をしている。勿論、家に帰ってきたらまずは手洗いうがいを欠かさない。風邪でもひいて妹に移しでもしたら大変だからだ。妹は粉薬は飲めないし、オブラードに包んでもダメ。カプセルも錠剤もダメ。結局、粉薬を騙し騙し飲んでもらうしかない。

「……」

あの苦しむ妹の姿はもう二度と見たくない。だから、きちんとするべきところはする。妹もきちんと手洗いうがいを欠かさない。

『チャララララ～♪　チャララララ～♪』

妹からのメール着信音が鳴ったので、テーブルにコーヒーを置くと、代わりに携帯電話を手に取った。素早くそのメールの内容を吟味する。妹は電話機能は使えるんだけど、メールは少々てこずっている。それというのも、中学生に上がるまでは妹は電話機能しかない携帯を使っていたから。

別に父さんの収入が少ないから機能の少ない安い携帯にした。ということではない。ただ、普通にメールを使う必要がなかったんだ。残念なことに妹には小学生時代に友達がいなかった。だから、メールを使うことはなかったんだ。

中学生になってから直ぐに友達が出来たので、携帯を新しい物に変えた。……まぁ、だからメールを使うようになってまだ一年ちょっとなもんで、妹は苦戦中なんだ。ただ、絵文字は使えるので文章の後に絵文字だけの文を付けてもらうようにしている。

だから、意味が全く解らないという場合は少ない。本当に解らない時はこちらから電話することにしている。で、今回のメールは友達の家に遊んでから帰るから、少し遅くなるねってところかな。

代表的な友達は二人……と、一体。多分二人のどちらかの家だと思う。二人は性格が正反対といえるくらい違うけど、どちらも妹のことを家まで送ってくれる。僕がいうのもなんだけど、ちょっと過保護的な対応をすることはあるが、でも対等の友達として見てくれている。だから僕も安心していられる。一体の方は不安と恐怖しかないので触れないでおこう。

あ、きちんと妹を送ってくれた後は僕が送っている。年上としても、男としても当然のことだ。妹も一緒に行きたがるけど、一緒にいるとはいえ夜道を歩かせるのは不安なので家出留守番してもらう。まぁ、夜道でなくとも夕方でも不安なので家に居てもらうけど。

『わかったよ。楽しんでおいでね。刀子ちゃんと静華ちゃんによろしくね。　兄様より』

妹に返信したので、残りのコーヒーをのんびりと飲む。これを飲み終わったら夕食の下ごしらえをしておこう。送った後だとちょっとだけ時間が掛かるし。

「にーさま、にーさま！」

夕食を二人で食べていると、妹が思い出したように僕を呼んだ。何か訊きたいことがあるようだ。

「どうしたの？」
「わたしは敬語覚えたいの！」
「敬語？　時々使えてるじゃないか」
「えぇ！？」

何故か目をまん丸にして驚きの声を上げる妹の口周りをティッシュで拭いながら言葉を続ける。

「何々です。何々だと思います。とかそういうのが敬語だよ。使っ

てるよね？」
「そんなことないよ？」
「無意識だったのか～」

無意識のうちに何かのキャラクターを真似ていたとかそういうことなんだろう。

「ところで兄様。敬語ってどういう意味なんですか？」
「あははは」

僕は妹が敬語の意味を訊きながら、敬語を使っているのがおかしくてちょっと笑ってしまった。妹は不思議そうに小首を傾げている。こういう仕草をさせると本当に可愛い。

「敬う言葉って意味だよ」
「敬うってどういう意味なの？」
「んー……そうだなぁ。ちょっと言葉にするのは難しいかなぁ」

敬うってことを言葉にして説明しようとすると、なんだか陳腐になってしまいそうな予感しかしない。あ、でも妹にはそっちの方が分かり易いからいいのか。

「んっとね、すごく大切に思うってことかな」
「んー？　では敬語はすっごく大切に思う言葉なの？」
「あっ、それはちょっと違うよ」

そう取られると困る。大切に思う人へ使う言葉……だろうか？
でも、そう教えるともう少し成長した時に意味に齟齬が出るだろるし。言葉を砕いて教えるのは大変だ。

「んぅ～敬うはよくわからないです。あ、兄様。教えてくれたお礼に今日の帰りに買ったプリンを上げるね。冷蔵庫に入ってるから持って来るね」

トトトトッと走り、パタパタと戻ってきた。手にはスプーンとプリンが一つずつ。それをにぱにぱ笑いながら僕の前に置いた。

「あれ、僕の分だけ？」

「お小遣い、それが最後だったから」

ちょっと照れたようにはにかむ。

「だったら僕はいいよ。食べなよ」

「ううん。元々兄様の為にって買ってきたから」

満面の笑みを見て、これが敬うってことだよって教えてあげたい。だけど、嬉しくて言葉に詰まった。なんていい子なんだろう、うちの妹は……。

「どうしたの、兄さまぁ？」

「その気持ちが敬うってことだよ。ありがとう。さ、僕は嬉しくてお腹がいっぱいになったから、お食べ」

「はいっ！　ありがとう、兄様っ！」

まるで僕からプレゼントされたプリンを食べているように、幸せそうな妹の頭を邪魔にならない程度に撫でる。明日の帰りはＢＩＧサイズのプリンをお土産に買ってこようと心に決めた僕だった。

?.みぃーたん

モーニングコーヒーを終え、今は読書をしていた。僕が好きなのはコーヒーだけではない。本も好きだ。特に歴史物。コーヒーに関わる物だととても素晴らしい。いや、普通にコーヒーが関わらない物も好きだ。後はミステリかな。

ジャンルは関係なしで言えば、終わりが始まりに帰結する物語は全てにおいて美しい。史実物では無理だけど、フィクションの歴史物はやはりハッピーエンドで締めくくれば文句ない。

「にぃさまぁ〜！」

今日も今日とて元気一杯愛嬌満載な妹が二階から降りてきた。パジャマのままで、手にはみぃーたんを抱いていた。

「おはようっ！」
「うん、おはよう」
「みぃーたんもね、おはようだって」

みぃーたんこと白いウサギのぬいぐるみである。全長三十センチ。これは妹が中学に上がった記念に買ったものだ。それを機に一人で

眠れるようにって。最初はみぃーたんを連れて僕の部屋に来ていたけど、最近はきちんと一人で眠れている。ただ、たまに寂しくなるのか、僕か母さんの部屋に眠りにやってくる。

「おはよう、みぃーたん」

「えへへっ！　今日はね、とっても楽しい夢を見たの！　兄様と一緒に遊園地に行って、いっぱい遊んだんだよっ」

　みぃーたんと一緒に踊るようにくるくるとその場で回る。よほど楽しい内容だったのだろう。いつも以上に幸せを振りまいている。そういえば、一緒に遊園地というのは行ってないなぁ。妹に友達が出来たので、それまでのように家族だけ時間を割いていたのとは違うし。でも、また一緒に行くのもいいかも。刀子ちゃんと静華ちゃんを誘ってもいいし。

「それでね、それでね！」

「うんうん」

「兄様と一緒にメリーゴーランドに乗って、兄様が抱っこしてくれたです」

　にぱにぱと笑いながらみぃーたんを自分の席に座らせると、両手の平を頭の上に乗せて、ぴこぴこさせる。

「うさぎさ～ん♪」

　うさぎが移動する時のようにぴょこんぴょこんと小さくジャンプして僕の目の前までやってきた。

「うさぎさん可愛いね。あんまりにも可愛いから食べちゃうぞ～」

「きゃっきゃぁっ！」

前からギュッと抱き締めてあげると、妹はとっても嬉しそうにはしゃいだ。このうさぎポーズをする時は、こうして前から抱き締めて欲しいという合図だ。昔からのコトなので、僕も子どもみたいな言い方でやらないとならない。

でも、手の中に納まる身体は昔より当然大きく、きちんと成長していることを感じさせる。それに、年々女の子らしい不思議な香りがするようになったのが、少し気恥ずかしい。

「今度一緒に遊園地に行こうか」
「ホント？　兄様、ホントですか！？」
「うん、本当だよ」
「やった！」

頭に付けていた両手をそのまま僕の背中に回すと、顔をすりすりとこすり付けてきた。髪が顔に当たってくすぐったいけど、それはまぁ我慢。

「わたし嬉しいです！　とっても幸せです」
「そっかそっか。それでさ、二人で行く？　それとも刀子ちゃんと静華ちゃんも誘う？」
「えっと、んっと……」

動きが止まり、むにゅむにゅと考え始める。そんな妹の背中をぽんぽんと優しく叩きながら答えを待つ。

「……」
「んぅ……んっ、んー」

五分、十分と経っても答えが出ない妹に、しょうがないなぁと笑いながら僕はこう言った。

「じゃあ、二回行こう。みんなと一緒に行って、違う日に僕と二人で行こう」

「うんっ！　兄様だいすきなのっ！」

力一杯の抱擁は少し苦しいが、これもまた我慢しよう。しかし、この大好きもいつか他の誰かへの愛してるという言葉に変わる日がくるんだよなぁ。そんな日を夢見ながらも、やはり寂しさも感じてしまう。今は精一杯この甘えん坊な妹の成長に手を貸そう。

「にいさまぁ！　あのね、えっとね。ウサギーランドがいいの！　みぃーたんがね、お友達が欲しいって最近言ってるんだよ」

「じゃあ、いい子にしてたら兄様が買ってあげるからね」

「えへへ～」

みぃーたんの心配も出来るようになった辺りが今の精一杯の成長かな。あ、関係ないけど一つだけ。お風呂は妹が小学六年の途中で一緒に入らなくなった。母さんが丁度お風呂に入る頃に帰ってこれるようになったから、そちらに任せた。今ではきちんと一人で入れる。

「わたしはいい子なので、今日は一日中兄様のお世話をするの！」

「そっか。じゃあ、まずは朝ご飯を作るから、顔と歯を磨いておいで」

「はぁい！」

祝日に相応しい、いい一日になりそうだなぁ。僕は椅子に座るみぃーたんの頭を撫でてから立ち上がり、大きく背伸びをした。さ、

お味噌汁を温め直して、何か一品多くこしらえようかな。大切な妹の為に。

?天使

たまには寄り道して喫茶店でコーヒーを飲むこともある。今がそのたまにの時間である。テスト二日目が終わった祝いという感じで。まぁ、テスト自体はまだ明日まであるので、友達ときている訳じゃない。だからのんびりとコーヒーの味に浸っている。

……浸りながらもいつものように他のことを考える。やはり妹のことだ。

中学校進級初日。つまりは入学式だ。小学生時代は居場所がなかったこともあり、行くのをけっこうぐずっていた。普段我がまま言わない妹がぐずるとけっこう手を焼く。母さんだけが入学式に参列するつもりだったのだけど、急遽僕も借り出される結果となって、妹は学校に行くことを承諾した。

そう、僕は高校入学初日をサボり、一月前に卒業したばかりの母校の入学式に参加したのだ。参加者の名前記入する机に座っていたのが元担任で、目が合うとお互い五秒程時が止まった。比喩ではなく、本当に止まったかと思ったよ。

それで、妹が入学するんでよろしくお願いしますと、先にちゃっちゃっと入っていた母さんの変わりに挨拶し、誰が担任になるのか知らないかどうかの情報を聞き出すことを忘れなかった。元担任は今年は二年を担当するらしかったが、学年主任だけあって顔が広く、直ぐ近くにいた他の先生に話を訊いてくれた。

担任であった頃はけっこう面倒な先生だと思っていたけど、意外と人間が出来ている性格だった。でないと学年主任なんて任されないか。などと関心していると、答えが返ってきた。残念なことに今年度から赴任してきた新しい女性の先生だったので、前情報を掴むことは出来なかったが、それだけでも知らないよりマシなのでお礼を言って中に入った。

先に席に座っていた母さんにその事を話すと、出来たお兄ちゃんがいるからお母さんは楽できていいわー。などといいながら僕の頭を撫でてきたので、慌ててその手を払いのけた。周りに親御さんしかいない中でそんなことをされるのは羞恥の極み。いや、周りに誰もいなくても思春期の男にそれは拷問だ。恥ずかしすぎる。

とまぁ、そんな些細なことはさておき。入学式は始まった。特に記すような事件も出来事もなく、胸を撫でおろした。入学式が終わり、校舎外で母さんと待っていると、妹は女性と一緒にやってきた。それが今年も担任となった、妹の先生。

人見知りの激しい妹がこんなにも短い間に誰かに懐くというのに正直言って驚いた。しかも、なんとも頼りなさそうで、腰の低い女性であったから更に驚いた。……本当に担任としてやっていけるのかな？　とか、本気でそう思うくらいにダメそうな先生だった。

それで、友達が出来る前は先生に会いに行くように学校に行っていた。理由がなんであれ、きちんと学校に行くのはいいことなので僕も母さんも喜んだ。辺倉先生の頼りなさそうさ加減は無視しておいた。精神的都合により、だ。

まぁ、これは後から解ったことだけど、辺倉（なべくら）先生はその性格上問題児だけを集めたようなクラスを押し付けられたようだ。赴任した矢先に災難だったなーとも思うけど、これは後の本人から言われたことだが、

「天使ちゃんが居てくれたお陰で、私は教師としてこんなにも嬉しい毎日を送れています。本当にどれだけ感謝していいものか」

辺倉先生はとても喜んでいた。ちなみに、天使ちゃんというのは僕の妹のあだ名だ。天真爛漫な性格と髪の色から付けた安直なあだ名。その名づけ親が辺倉先生なのだが、敢えてそこには触れないでおこう。

そして、妹は晴れてゴールデンウィークに入る直前に初めてといっても過言ではない友達を得た。それが度々名前に上がっている刀子ちゃんだ。と、まぁ。コーヒーも飲み終えたのでこの辺で家に帰るとしますか。

「ごちそうさま」

お代を払って外に出た。そこで、タイミングよく妹からのメールがあったので、四人分のアイスクリームを買って帰宅することにした……。

「兄様！　おかえりなさい！」

元気いっぱいに笑って出迎えてくれた妹に、よしよしと頭を撫ぜるとにぱにぱと笑う。とても可愛い妹だ。

「お邪魔してます」

白のワンピースを清楚に着こなし、長い黒髪をバレッタで留め、どことなく育ちの良さを感じさせる少女。発育も妹より一回りよく、高校生にも見える彼女の名前は二階堂刀子（にかいどうとうこ）。この子が噂の刀子ちゃんだ。妹と違って可愛いではなく、綺麗が似合う女の子だ。性格は名を表すを否定する存在その？ともいえる。

この街にある二階堂病院の末っ子。歳の離れた姉が二人いるようだけど、姉妹内での交流はないようだ。刀子ちゃんも中学になってうちの妹と仲良しになるまでは、友達といえる存在はいなかったとか。優しいんだけど、引っ込み思案な性格の所為だったと思われる。慎重は妹より二センチくらい低いかな。好きなアニメは童話が元になっている物。学園ラブストーリー。

「おっす。邪魔してるよ」

続いて現れた少女。肩先まである髪は外に跳ねていて、活発な性格を髪が表している。で、先に言っておこう。さっきのその？がこ

の子である。御門静華（みかどしずか）この街の市長の一人娘。存分に可愛がられ、甘やかされて育ったようだ。本人の話では小学六年生の時に学級崩壊させたことがあるとか。

……うん、正直納得出来た。嘘や誇張ではなく、この子の所為で学級崩壊が起きたらしい。中学上がってからも同じようなことをしようと考えていたとかあっけらかんと告白された。勿論、今はそんなつまらないことを考えたりはしてない。中世的な顔立ちで格好を男っぽくすれば男の子にも見える。というか、スカート穿いてないとよく間違えられるとか。身長は百六十三センチくらい。好きなアニメはロボット物。

ここで目だけでもう一体が居ないことを確認して安堵した。アレを入れて仲良しグループなのだけど、僕的にはちょっと考えられない。

「天使ちゃんは本当にいいなぁ。私もお兄様が欲しかったなー」
「ボクも兄ちゃんみたいなのだったら欲しかったかもな」
「えへー。兄様はわたしの兄様なの～」

妹はご満悦のようだ。声がいつも以上に高くなっている。持ち上げられるとちょっと照れるので、ちょっとだけ茶化すような発言をしてみた。

「こんなに可愛い妹たち三人に出迎えてもらえて、兄としてはとても光栄だよ」

でも、僕の言葉を聞いて刀子ちゃんが一瞬暗い顔をした。なにか地雷でも踏んだかと思ったけど、直ぐにいつもの綺麗な笑顔になったので気のせいかなと深くは考えなかった。二ヵ月後に思い出させ

られるコトになるのだけど、それはまだ先の話。

そうそう。二人が僕のことを『お兄様』『兄ちゃん』と呼ぶのは僕の意思ではないよ。名前で呼ぼうとしてた二人に、癇癪起こすように駄々こねて泣き出してしまったのだ、うちの妹が。理由は分かってないけど、二人で考え今の呼び方にしたようだ。あの時はどうしたらいいのか本当に混乱させられた。

「兄さまぁ～一緒に遊ぼ！」
「そうですね。一緒にお話でもいかがですか？」
「ミャーのやつが起こした新事件とか、話すネタはたっぷりあるしな」
「そうだね。ま、いっかな」

三人との話は大いに盛り上がり、遅くなってしまったので二人を家に送り届けた。その後、まだ明日がテスト期間だったことを思い出し、一夜漬けをする破目となった。試験中の勉強は計画的にしよう。

?:マイペース

高校二年生ともなると、真剣に将来を考え始めておかなければならない。今になって考え始めるのも若干遅いかもしれないけど。進学にするか、就職にするか。まずはこの二択。収入状況からいえば就職が好ましいけど、今は就職氷河期。大学卒でも微妙なライン。どうすることが好ましいのか。これは今日の夜にでも母さんに相談しないといけないな。

「兄様ぁ！　ただいまですっ」
「ああ、おかえり」

先ほど玄関からも聞こえた声に返事をしたのだけど、妹はきちんと面と向かってする挨拶が好きなので、こうして二度目の挨拶することは多々ある。自分だけの将来じゃなくて、妹の将来も考えないとなー。難しい。

「どうしたの？」
「ん、ちょっとだけ考え事をね。学校は楽しかった？」
「うん！　今日はね、社会の時間にね……」

妹が一生懸命話す内容を椅子に座らせながら聞き、話が途切れた時に聞いてみた。

「大きくなったら何にをしたい？」
「兄様のお世話をしたいです！」

両手を挙げて、万歳のポーズでそう答えた。

「僕のお世話？」
「そうなの！　朝は兄様を起こして、ご飯を作って、兄様がお仕事

をしてる間に、家のことをするの。それで、帰ってきた兄様におかえりなさいをして、夜ご飯を一緒に食べるの！」

話だけを聞くとお嫁さん的なものだけど、兄妹なので意味が違ってくる。それはともかく、今より成長したいという願望があるってことだよね。そういうことを考えるってことはやっぱり、日々成長してるんだよなー。以前母さんと話して時にこんな事をがあったっけ。

「十年後くらいはどうなってるんだろう？」
「あら、お兄ちゃんは心配なの？」
「そりゃ心配だよ。いい人でも見つかってればいいけど」

僕の言葉にニタニタした笑いを浮かべる母さん。なんだろう、その気持ち悪い笑顔。

「お母さんは心配してないわよ。いい男が見つかろうと、見つからないままだろうと。お兄ちゃんがいるからね」
「常に僕がいれる訳じゃないし。このままだといつか不幸な目にあうんじゃないかって、やっぱり心配になるよ。もっと早く成長して欲しい」
「いいじゃない。あの子のペースで成長したって。有名なドラマの歴史教師も言ってたじゃない『五分や十分急いでどうする？　地球はお前の為に回ってるんじゃない。私の為に回っているんだ』ってね」
「それはない！　そんなこと言ってないし、あの人は歴史じゃなくて国語教師の筈だ」

そんな発言する教師がいたら、ＰＴＡが黙ってないって。今や教師の立場は目に見えて悪くなっている。実際に最低の教師もいるし。不安の芽は尽きない。

「いい？　大切な事だからよ～く覚えておきなさい。女の子の成長っていうのは、見た目からじゃないの。心から成長していくものなのよ。男の子は身体から成長するけど、その逆なの。だから、あの子の心が覗けたらきっと、お兄ちゃんは驚くんじゃないかしら？」

確かに驚いたよ。僕のお世話をしたいっていう言葉。何よりも嬉しかった。でも、五年先、十年先となるとやっぱり分からない。傍にいてあげたくても、傍にいられないかもしれないし。でも、そんなことを言う必要はまだないかな。

「どうしたの、にいさま？」
「ううん、なんでもない。それと、ありがとうね」
「んぅ？」

小さく首を傾げた後、天使のような笑顔で頷き笑う。

「どういたしまして！」

どれだけ成長しても、この天真爛漫の笑顔と純真さをなくすことはないだろうな。きっと、十年後も二十年後もマイペースでいるに違いない。何故だか胸が温かい気持ちになった。

「兄様兄様。何か疲れてるみたいだから、肩を揉むの！」

言い出すや否や、直ぐに立ち上がって僕の後ろに回り込む。非力ながらも精一杯肩揉みする妹の優しさに包まれながら、僕は小さく笑った。

?堕天使爛漫

時は夕方。まもなく六時になろうとした頃。夕食の準備は終わっていたので、妹に誘われるままにＴＶ観賞をしていた。といっても、妹が好きな魔法少女物のアニメだけど。そして、今次回予告が終わったところだ。

「兄様ぁ……どうしてアニメは終わっちゃうの？」

泣き出しそうな声が切なさを刺激する。このアニメが次回最終回なのが寂しいみたいだ。

「アニメに限らずね、全てに終わりはあるんだよ。それが自然のことなんだ」

「公園ですか？」

「そっちの自然じゃなくて、当然とか当たり前って意味だよ」
「そんなのイヤイヤ！！」
頭を激しく横に振り、何かを拒絶するように僕に抱きついてきた。訳もわからず、取り敢えず僕は妹の頭と背中を撫でて落ち着かせる。
「おわっちゃうのはイヤ」
鼻をすする音の後、言葉は段々と滲み、最終的に泣き出してしまった。それほどまでにあのアニメが終わってしまうのが嫌だったんだろう。僕はそう思ったけど、答えは違っていた。泣き出して二十分くらいだろうか。妹が滲んだ声のままに呟いた。
「兄様はこれからもずっと、ずっとそばに、ひっく……うぅっ、いてくれる？」
僕はどう答えるべきか迷った。安易な言葉を吐くのは簡単だけど、妹はそれを自分の中の真理としてしまう。だから、気をつけないといけない。
「……」
僕は答えを紡ぎ出せないまでも、妹を力強く抱き締めた。これが精一杯の答えだと伝わるように。妹は嫌がる素振りもなく、そのまま疲れて眠ってしまった……。
「た～だいまっ！」

早く帰れてご機嫌なのか、嬉しさ大爆発が声に篭っていた。

「しっ！　起きちゃうから」

夕食がまだなこともあり、部屋に運ばずにソファに横にして、その上にタオルケットをかけている。起きたときには泣いていたことなんて感じさせずにお腹減ったと言い出すだろうと想定し、いつでも食べれるようにしてある。

「あらあら、天使ちゃんはお休みなのね」

「母さんまで天使って呼ぶなよ」

「いいじゃない。正にこの子に相応しい名前だわ。なんで生まれた時に天使って名づけなかったのか後悔するくらいだわ」

呆れ交じりの僕の言葉はあっさりと三倍返しで返って来た。子煩悩の母さんには妹の背中に天使の羽根でも見えてるのかもしれない。

「あぁ〜〜でも寝てると本当に天使よねぇ。なんて可愛いのかしら。もうっ、ちゅーしちゃおうかしら」

唇を尖らせてちゅーの姿勢に入る母さん。正直、そんな間抜けな顔を長男としてみたくない。

「いい加減キスはやめろって」

「いいじゃない。いつまで経っても子は親にとって子どもなんだから。あっ、もしかして妬いてるの？　大丈夫よ、天使ちゃんの次はお兄ちゃんにもちゅーしてあげるから」

悲しいことに、この母は冗談ではない。本気で言っている。中学

上がった日に同じような展開で、キスされたのはけっこうトラウマ。授業参観とかで美人だよなー、とか言われるが、俺にとってはただの母親なので外見なんて関係ない。母親にキスされて喜ぶのはせいぜい遅くても小学生低学年までだ。

「いらないっての！」

「じゃあ、天使ちゃんにお兄ちゃんの分もするからいいもんねー」

いじけたように言うと、再びちゅーの口を作って妹に顔を近づける。この時、本当にキスをしていたら僕は色んな意味で助かったのかもしれない。キスを止めるんじゃなかったと後悔することになった。

「んぅ……にいさまぁ」

「あら？」

再び母さんのキス攻撃は中断した。妹が寝言で僕のことを呼んだから。次の言葉が僕を悪夢に突き落とすとは知らず、この瞬間はとても心が和やかにされた。

「きもちいい～！」

その時、僕と母さんの時間は止まった。いや、むしろ凍った。キスをしようとしていたので、僕から背を向けた状態の母さん。妹はこないだと違って眠ったまま。僕はどうしていいか分からずに動けないでいる。

それでも頭の冷静な部分でこんな訂正をしていた。いつか言った

『終わりが始まりに帰結する物語は美しい』という言葉。大いに否定したい。あれは始まりが綺麗な場合に限りということを身を持って知った。

さて、これから僕に顔を向ける母さんに僕はなんて言えばいいのだろうか？　正直、全てがダメなような気がする。最初から王将のない将棋をするようなもので、どうやっても勝ちようがない。

ただ、今解ることは、きっとその時の僕の言葉は色々と足りていないだろうということだけ。そして、小悪魔な寝言をした我が家の天使の目覚めを、僕は誰よりも深く望んでいる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3180u/

天使爛漫

2011年6月24日12時34分発行